

白湯の味とのんでしまつたぐすりの、あじ

湖山重三

晴くだけにしてあるはたけ夕月がもう  
ざんがいのまま春が崩れてゐるのも雨が降ります  
豆づる花をつけました月夜は風の出でゐる

大根の花は雨は日ぐれのあめ  
まくらにあたまのせて今日が終り

關口父草

ふりいでて春あかときの雨しとしととふる  
皿のせりなどあおい子もとしよりもゐてたふる

おやぢにはまご子といつしよにつくる親爺のつくるそのまじり  
月がこの山の木をいでて月夜である先生ととんぼん

鹽田正吾

夜明けてゐると風のあゝる竹

丸い大きなテエブルの、太平洋の海に春雨  
山のいわをにすみれがさく風は海から吹く

大竹大三

きうりのつるが手をさがしてゐる梅雨の小止み  
夜明けの山のかなかなかな蚊帳のなか

ことしのかつこう赤んぼがあくびしてゐる  
のびるの花海はしづかな梅雨に入る

親井寧牛花

こぼれて生えて雨をまつ  
蚤のあとかいて起きておさない

背は葉かげの青い来るまで待とう  
この庭の一本きりのなつしげる

吉澤稻市

駐在所の巡査の作つた大根の咲いた花で夏がきた  
柳の色が夏になつた町を人が歩くのが夏になつた柳

山に雨雲あるれんげ田はれんげの色に日のある  
釋山啼いたあとで二つきりで啼いてゐる

ゐて、或時は土佐二郎光親など、落談して、クラン

ツクなものを書いて、アゴをなでゝゐる彼である。

實に、タンゲイすべからざる彼である。それでゐて

世間にはさつぱり其名を知られてゐないのだからふ

しぎである。の傳記ははつきりとしなが、尾州

西春日井郡杉村樹原なる郷士、野田清藏の三男とし

て天保二年に生れ、明治廿一年九月、下總の松戸に

歿したといふことだ。一片貧困の中に流浪して、い

はゆ旅繪師としてからくも口をノリしてゐたらし

い。信州では赤坂新田、岩村田、中込、北佐久、前山、

岩野、下縣(南佐久)、古奈曾、小縣等に足をとゞめ

てかいてゐたらしい。私が鐵山の作を初めて知つた

のは、數年前に諏訪の關澤氏の家で、數十幅、鐵山

を見たことにはじまる。其後、鐵山の所神家をつ

ねてゐた。如風君が其の一人であることを今日

知つたのはうれしかつた。君は十數幅を愛藏してゐ

る。それを、點々と展べては、何れにも感嘆した。

なほ、層雲の誌友諸君にして、鐵山を所持してゐる

方があつたらば、御知りせを願ひたい。「鐵山」の外

に、「光親」「天香」「黄中子」と署名したものもある。

三井村に關口江畔君をたづねた。君は父草君のオ

トウサンで、今年八十三になる。耳こそ少し遠くな

つたが、カクシヤクたるもので

八十三の父上と稱をまききのふけふ 父草

住むとし井戸を掘り水のたまつてくる音

日向野秀策

ランプにみたす石油のいろ、のようにな風  
おさなく白がすりのみたまむかえの灯をもつ  
みたまむかえて灯すにむらさきにさく  
しげつてゐるだまつてゐる

里井正子

夏といつた匂ひする空ふかい呼吸する空想する  
あたらしい生活をねがうきもち豆のきやがすけてゐる  
海のある事をときどき目をあげて膝に心理描寫の續いてゐる本  
オルガン、いつからともなく梅雨がふりだしてゐる  
いもづるのびさかりうちの子供いつもはだし

水谷青史

先生かると筆を風が夏朝（迎井師）  
子供舟で遊び田植終つてゐる  
三日月が出てゐる塀の上の猫のしつぽ  
出てゆくに戻るに馬は柿の花咲く柿の木  
いもうととおとうととつんできたせりのしる

篠崎青鳩

てふてふ島へ長い橋があつて  
銀世界になりそなたな街燈がともつてゐる  
砂のなかに夕焼がしみこんでしまひひとの指が花のような  
やまびこよふたりはこうふくです

内藤善知

お星さまへ、ぼくのなみだで切手をはります  
線路の草つよしそこをこどもあるいてゆく夕焼  
正直もんが馬鹿をみる世の中でことしも夏は夏の草  
若葉、少女のテニス服と乗馬服と日のささないうち

平松星童

ちよつとえんぴつがきの草のむかう赤い屋根があつて燈だして  
此の子學校へやるだけが、夏の日がちやがちやみしんになる

とある通り、農耕をしてゐる。父君の子もかなり  
大きいし、父子孫の三人が膝をそろべて、ソウ  
リを作つてゐるといふ。その風はさぞ美しかろう  
と思ふ。私は、江畔作るところのソウリ一足をオミ  
ヤゲとしてもらつた。江畔の家は坂の上の一軒家  
で、庭にはキキョウユリがさきみだれてゐた。此の  
キキョウの根をもつて約束をした。

上田に高橋妖佛君をたづねた。私が輕井澤で世話  
になつてゐた山莊の主人である。私が上田に最  
に来たのは、大正六、七年頃で、今から三十三年ほど  
以前になる。妖佛君はその時代の層雲人であつた。  
同じ時代の人、布施抱徳、田口頂星なども出てき  
て、一晩話した。何れも、六十歳以上の人なので、  
上田に若い人の輩出——當時、一石路がこゝから出  
てきたやうに——を期待してゐる譯なのである。

湯田中温泉の湯本旅館に來た。こゝへ來るのも四  
五年ぶりである。先着して私の着くのを待ちかねて  
ゐた北瓊と、太田村の白夢、千可志の二、が雖れの  
座敷で晝寝してゐた。私が書いた「晴雨の湯」とい  
ふ大きな額の下にある湯槽に、私がいづつてゐる  
と、そこへはいつて二人連が、その額を見なが  
ら、一人は、晴雨の湯といふのは井泉水が名づけた  
のだといひ、一人はイヤ一茶が名づけたのだといひ

野火

池原兼眼洞

野火、雲影は雲が日にふれてをる  
 風は藪が圍うてくれる家の二三軒が海苔ほす  
 降つて滴る雨がまだ枯れたままの木の中の洋館  
 くらがりあめがやんでるてはる  
 よく吹いて春がくるガラスの外は街道  
 ひばりなきあがり遠いみづうみ  
 つばくらがもう、村をばなれて二三軒をばなれてはんと村がなくなつてしまふ  
 ドアがあくと日本人の女中さん白い洗濯物たくさん春の日に  
 春は、逢うて口笛わかれてゆく  
 壺をはなびら沙川汐のひくさいちゆう  
 腕をかえして見る時計の時間をきく

港の雨

近木黎々火

日のさす雪に影引く  
 からだから芽を出して木である  
 春の日はあつて外  
 古い鐘をもち山に入る  
 月をかほに別れたうない  
 月の石くもる  
 烟で足のうら雨が来た  
 茄子の花むらさきに確實につく  
 港の雨が船の出たあとの山  
 湯から白い肩を出し遠い浪音

て論をはじめたものだ。私はたまつて聞いてみた  
 が、けつきよく結論なしに終つたらしい。世間の論  
 議はおほむかひかくの如きものかと思ふとおかしい。  
 因に、一茶時代の温泉は今の場所とは違つて、往來  
 に近い今座敷になつてゐるところにあつて、私が最  
 初こゝに來た頃にはまだ傳説が存してあつた。それ  
 は「如意の湯」といふ名で——「座敷から湯にとび  
 こむや初しぐれ」といふ一茶の句の趣そのまゝであ  
 つた。今の「時雨の湯」は昭和になつてから今の主  
 人が設計したもので、その新湯の名を私が考へてあ  
 げたのである。もゝろん、一茶の「初しぐれ」とい  
 ふ句に因んで「時雨の湯」と名づけたものである。

北瓊が一茶を二點持つてきて云ふのに、之は長野  
 のコトウ商にあつたものだが、一つが千圓、一つ  
 が七圓だといふ、同じやうな大きさだ。ところで  
 見ると、安い方のものがホンモノで、高いといふ方  
 がニセモノなのだ。世の中のネウチといふもの亦、  
 すべてかくのごとしと思へば、これもをかしいので  
 ある。  
 (八月十一日)

北佐久にて

佐藤 龍

8兄——井泉水先生にお逢ひ出來ました。八月八  
 日朝早く、岩村田に行かれるのを御代田驛でお迎へ  
 しました。開襟シャツ半ズボンステッキツを持たれた

けふこのごろ仕事たぬしく朝富士夕富士とたぬしくけふ七夕がうれしき子供らよからすがかえるよ紫陽花のはなもあついきかりの三味のねをきく夏の日あつししづけし婦人の時間の婦人のこえ青い葉青い雨蛙のゐてきよの好き日くれゆく工員一人が辯證法をよんでゐるのも夏の日暑くなつあさの竹の青しともあさひさしてあさげのまえ簡易住宅が版畫の様な月夜になつてゐる涼しきなつ夕べのしあわせは赤い小さなガラスパイプちかごろ仲買でもしてゐるらしく主人のトマト色づく

## 頬杖

芦立陶抄子

朝になるときののでんきが葉の中ほんに二三本の竹の子に朝がきてゐる夢の丈ほどな子で晝前の學校から歸つてくるつゆけく鈍さげて藏のうしろが竹やぶ鮎さげてゆく人に竹林のあめ女黙つてゐたりすることも錆びないナイフと桃蛙の聲ほどの星の、二人別れてくらすよりしようがない月がでてきた月夜で女一人でくるすこし春の夜ではあるが頬杖なども女一人でくらししてゐる星のかげほどの思ひ出の星ほどの遠さになる

た先生は都會的な若々しい感じで、遠分から同行された龍興氏の飄々の姿とは對照的なものでした。

バスに乗つてから父草さん、時間、打合せ等をされる先生の口調は、や、早口ですが明快で……愚かな末弟は先生に逢えた嬉しさにをわわして感激ばかりしてゐました。

如風さんの家では……あな、御存じのやうに如風さんは不自由な身をいとはずに鐵山の軸をあれこれ掛けて説明する其は先生に逢えた樂しさに溢れまことに美しい風景でした。

さうして先生らが語られるのを聞いてゐると、藝術に生、藝術を愛する人がかもし、す特殊な雰囲気は醉はされるのでした。

あなたも通られ、あの坂道を、それから江畔さんのお宅へ伺ひました。晝食後、先生を圍んで座談をしましたが、話題の豊富な先生、圍んで皆は倅せな顔をほころばせました。やがて例の俳句第二藝術論に及ぶ先生の明快な論が時々笑ひを、んだりして話は自然「道」といふ事に及ぶ。先生が三十年以上も前に主張された藝術以上の藝術といふ言葉が今にして尙生々としてゐる。時代や環境を超越した先生の信念に深くうたれました。私はたどたどしながらも今日迄層雲を離れずにあて、今日、始めてまことなる道を知り得て喜びに耐えませんが、今日、一つの段階を進み得た事の、己の行く道に誤りなしとする確信のわいたことを有難く思ひます。

清 露 抄

井 泉 水

住居のひろき櫻があつて櫻ちるとき 芹田 風車

昔は短歌でも俳句でも「詠」といふ氣持が中心になつてゐた。「詠嘆」とか「詠詠」とかいふ言葉がそれであつて、對象を「しみみ」と詠める」といふ氣持である。近頃では、さういふ氣持をとかく「ふるい」といふ風にきらう傾きがあるけれども、一がいに決してきらうべきものではない。「味ひ」から云へば「大味」といふかデリカシイの乏しい點が、新しさ一方を好む人々には食ひ足りないだろが、デリカシイを求めるのあまり、神經のこまかい、線の細いリズムのやゝこしい、従つて「通人」好みともいふやうな弊を生じはしないかとも思はれる時に、その反對作用としてもかうした「詠」の入つた句を擧げておきたい。

「住居のひろき櫻があつて」——大そう豪華な屋敷らしいが、此句に於て詠められてゐるものは「華かさ」ではなくて、むしろ「荒涼」たる「さびしさ」である。と云つて、人の住まない明屋敷ではない、ホンの小人数で住んで、部屋の廣いのをもてあましてゐるのだ。それでも廳を草だらけにしてはおきたくない「ほこり」と「たしなみ」とを持つてゐる、さういふ人と見える。(今の世相にして云へば、財産税として此の屋敷を物納にしなければなるまい……)。

「櫻があつて櫻ちるとき」といふ言葉が、さうした心持を好く浮き出してゐる。此の言葉にさういふ「句ひ」が感じられるのだ。ちるとき」といふ抽象的な云ひ方は生ぬるいやうでもあつて、そこに詠

め入つた氣持が感じられる。で、若し、これが——  
庭のひろき櫻があつて櫻のちる。

であれば、全然別個の、きはめて平凡な句になつてしまふであらう。

山の朝は梅の咲く二三軒起きてゐる 秋山秋紅蓼

あまりにたん／＼としてゐて、味といふものが何處にある、解らぬやうな句だが、此の墨一色のやうなスツキリとしたリズムの持ち味は、俳句の本領といふか、本格といふか、とにかく「風格」をそなへた句である。「山の朝は……」と、おほどかに響き出した氣持を受けて、その山の朝にどんなすばらしい風景でもあるのかと思ふと、何のことはない、梅が咲いて、家が二三軒あるといふのだが、この「梅」といひ「二三軒」といふ自然さにこそ、ほんとうの「山の朝」のすが／＼しさ、「山の朝」のほがらかさがあるのである。もつとも、これに句として生命を吹き込んだものは「起きてゐる」である。起きて何をしてゐるのでもない、「起きてゐる」ことのほがらかさである。いままで睡つてゐたものが覺めて、これから一日の活動に入らうといふ態勢のそのはじめの、いはゞ「動き」を含んでゐる「靜かさ」、それが「起きてゐる」といふことである。「梅の咲く」と「二三軒」との関係は、ふかくセンサクする要もなからうが、梅の咲いてゐる家だけが二三軒あつて、他にも家はあるがその家には梅が無い——といふことではない。又、起きてゐる家が二三軒あつて、其他の家はまだ寝てゐる——といふ意味でもない。そこにあるだけの家が二三軒であつて、其の二三軒が起きてゐるのだ。つまり「山の朝は梅さく。二三軒起きてゐる」といふ風に句切つて味へばいい。

此の梅の匂もいふ。梅といふものゝ姿態といふか、個性といふか、いや梅といふものゝ生命といつた方がよからう。それをしつかりと感じ、それをハッキリと打ち出してゐる。「春は曙」といふ言葉がある。その曙のうつくしさがじつにミツ／＼出てゐる。曙といつても一やうではない。夜半から朝になるまで、潮通りの段階がある。しら／＼と雲の動きをめぐめ暮時が「しの／＼め」だ。それがほん／＼と白んできた時が「あけぼの」だ。それが又一きわ明るくなつてきた時が「あかつき」だ。それからハッキリと晨朝になる。その上に、朝日が昇つてくるのだ。ここに梅の木が立つてゐて、それが夜半から朝になるまでの曙光の展開してゆくさまを、その生命の感じをもつて反映してゐる。「くらいうちにさいて」といふ、まだ闇である中にその闇の色ににじんで、ほの白く點々と、豆がはじけてゆくやうに、開花してゆくらしい、そして曙の色が定まるころには、もうピツシリと咲いてゐる——これはさういふ印象を得たのである。じつさい、梅は蓮のやうに夜はつばんで、朝は一せいに咲くものではないが、さればこそ、事實を書いたのではなく、印象を嘗いた氣持としての新鮮さがある——さやうに、其の梅の木が朝を待つ姿勢になりきつてゐるところに、其の時、はじめて日がさしてくる。「咲いて……うめ……日のさして……」、このリズムがその氣持をくつきりと彫りあげてゐる。さうして「日のさしてゐるいろ」と、其の「光」を「色」と感ずるまで明るく描きあげて、しづかに筆を置いた氣持に、此の作者のおつとりとした息づきも亦感じられる。此の「いろ」は勿論、赤などの色ではない。色とも云はれぬ白いものを色と見たところが、朝の光のうるはしい感じなのである。

平々凡々な人間の生活、その中にある楽しみといふ程ではないが心足りてゐるもの——つまり「平和」とでも云はうか、とにかく何は無くとも「平和」であることは佳いといふまでも、それがぜんたい的に出てゐる。大きなせんそうが終つて、われ／＼はホツとした。だが、ホツとしたといふだけで、生活は苦しい、ドン底におちたといふ思だ。しかし、此のドン底から今や立ちあがろうといふ望だけは失はない、そして平和といふものだけはたしかに取りかへしたといふ安心である。戦争中は、鎮守のお祭さへも中止されてゐた、そのお祭が復興されたのだ。昔のお祭のやうな華々しい催しは出来ななければ、とにかく「お祭がくる」といふことだけでうれしいのだ。主食は薄配だ、それが日本中を暗くしてゐるものゝ、まあ飢えるといふこともないのが有りがたい。僅かの土地ではあるが、それを「うちの島」として作つてゐれば、その島は菜づばが青く、先づ、うちで食べるにはどうにか事が足りる。この氣持がうち中「みんな裸」でソクサイであるといふ氣持なのである。「みんな裸」とは何とほがらかな言葉ではないか。——そこで一句を讀み直してみよう——「お祭がくるうちのはたけが青くてみんな裸」——「お祭がくる」こと、「うちのはたけが青い」こと、「みんな裸」であること、此の三つは三つの別々の事を並べたのではない。お祭が来る、何處へ来る、はたけの青いところへ来る、はたけが青いのは誰が見てゐる、みんな裸である其の人たちが「うちのはたけ」だなどといふ氣持で見えてゐる。さういふ風に味つてみると、此の句のおもしろさが解るであらう。

明月壇

鉢に咲きつつじ夜に咲きつつじよい雨ふる

雲のきれ間の日さしが製材所又挽きたしてゐる

ざくろうるばばももしつらねたるおまつり

星の座がまつた月夜

雨はれし木の芽つみにでる

行き行く晴れてくる夢畑夢畑

朝とうめいにもえる熾がきたえられてゆく

植えおわり照りかえすをお茶にしてゐる

夕なぎ月を出そうとするあかるい雲がある

あさまである月に牛乳くばつてあるく

月かけ葉をむしるしくしてなにもいはない

とぎすませば涼しい刃のひかり夏の雲通る

さばてん花を吐く日が烈日になる

夏雲、あゆは銀の木の葉のよう釣れてくる

ホームのつばめのむねしろい汽車の時間ををる

戀を戀してゐるさびしさよさが花になつてゐる

もどりは日のあるうちの藤のうすむらさきな

風にちるばかり、旅からもとつとめにゆく

影は日南の、日影になつてくる雞小屋のわたり

田は植え終り、鷺の二羽と遠山つらなり

桐井あしひこ

池沼 星見

平野 草介

内藤 英夫

青葉の雨も、青葉に灯のともるところのやんでゐる

いなづまが涼しい露室の暗いともび

句のままなせんせいのお盆へつぐがたぬしく

ほうき草、いづもしめてあ、隣子今日 通り

ちちが病ひやしなひしいやゆにきてやせたからだ

水には山の影、水底まで澄んでゐる

太陽が出る霧の中の柳の葉

花もさかりな打水の石、蟻がある二つばかりで

鉢に、桃、水音のきこえてくるので

植え終つた田と田とがひつそりと雨になる

道ばたトマトが赤い小母さんの家すだれが涼しい

落ちて南瓜の花がまるい宵となる毎朝しづく

田舎はどの家も静かな煙にして夏暑れてくる

流るる水にもはなにもしづかなあめ

山の中にも無がきてみる竹藪一軒の風がないとき

もろこじのはなり夜看護婦さんとゆかたのわたし

すだれにきてゐる風をはだかだ病みてゐる

そばを刈る娘一人もち山の尾に住み

苗代田れんげ田今日は釣場へ行く

藪は藪として残しうまやのあたりささなき

葉のあるほほじるの鳴きやうよ短夜

待ち合す子の傘さしてゐるあぢさい

脈をみてあぢさいを見てお醫者さんなぐさめて

赤としろの山茶花 垣根は齒醫者さんで窓が

床についてからは秋はれの松の枝ぶり

佐藤 龍

水田草史郎

雨宮すぐる

中西 國友

矢島川せみ

吉原三峽水

雪がぼたん雪になつてきた静かなピアノが知つてゐる曲  
英字で書かれた道標がここから備中に入る冬菘の實  
雪どけの猫柳の芽は少しふくらんで鐵橋を通る笛  
里へは近道があつて白い土蔵があつて秋の日  
ふと女の肩が泣いてゐる  
むし暑い夜のスパークが白いハンカチ手にして  
ぬれて南瓜の大きないなづま  
どこまでも二本の線路で静かな夏空  
夜なかの月が山にかくれきつた静寂  
藤の花たれてさいてゐる仰向いて見てゐる  
ガラス越しに通る風景のテーブルいちごみるく  
いばらの香が山路となる路の上に路の下に  
ひばりのおしやべりがれのこるなのはな  
牡丹の深紅なる葉にかくれて雨ふりかかり  
雲雀があがる夢畑のまんなかのお墓にまいる  
朝霧に日輪くつきりいもの花咲いて  
外は青海こどもが繪本見るほど電車すいてゐる  
水をのんでは空をむいては白い鷄夏になる  
白シャツのカフスボタンの赤きはあなたのまごころ  
今朝の暑さ川の水上へ流れる  
青葉が夕暮れの煙立ち昇らせてふくろう  
説経終れば夜明けのがなかな  
佛さまに櫻の花をおかきは焼いてあげます  
こども背なに風ふくつくしんぼ  
山は背月のさくらも咲きそめようひつそり

三好 米子

安達 俊朗

森田 和夫

石井 洋香

梁瀬 阿羅輿

吉村 しをり

走内 庭草

ゆうべ子を拖き柿の芽はころんでゐる  
つゆばれの山の形もふる里に一泊  
さばてんの花あれからの驛どうやら無事であつて  
こぼるぎ生きてゐるので鳴いてゐる  
はれて夕ぐれのお使ひにゆく雲  
夜になつた川音へ家が灯してゐる  
落椿、少年すこしびつこで来る  
ほつとり背中がつくしんぼう  
梅が固いつぼみでまだ誰も来てゐない庭へ廻る  
お別れに、逢えなくて柿の花落ちてゐる 俊二さん去鐘  
沈丁花、ひめごともつてゐていのかと思ふ  
移の林もみどりをおいてきたしづかな夕べです  
じやがいの花、夕づくと白いシャツで退けて  
光が木の葉をおちてまもなくあさひ  
まだつづくと言ふ雨の電氣がついてあき飯  
おちばをゆくせんせいのはかまのにはひらいてゆく  
春のうしほに海の鳥居の日ぐれどきかな  
雨が咲かせたしろい花日ぐれてもふる  
夕日汽車の中で貝のなくのをひざにしてゐる  
風が、竹の子竹になつてゐる  
かぼちやの葉つばかみきり虫がゐる  
夕日が一軒一軒町の裏紙芝居ふれてくる  
灯に身をぶつける蛾のゐて机がある  
外の青葉が部屋いつぱいの風になるリズムになる  
少女等ボールを追ひかけるひかりが追ひかける

田中 無絃

加藤 六六子

遠藤 源治

鈴木 單衣女

田中 操

三好 茶丘

淺野 保榮



青い山に青い山が穂にでる夢が家の前から  
赤い山肌は日のさしてくる青葉、亜炭坑の口見える  
とうきび石のせてあ、屋根の高さになつてゐる  
ちよつとは晴れて陽のさした梅をつけます  
うすいブラウスの女が通ると燕すつと運る  
朝は蓮池に風が來てゐて坐ることする  
障子のきり張りも母とこんな好い日が柚子の木匂ひする  
出産届やら死亡届やら照つたり曇つたり柿の若葉  
前の田には鷺家の横の田も植え終り  
どうだんの花こぼるる夕日の蟻のいとなみ  
螢かやにはなして眠る子とねむるとす  
雨あがると山の空の雲、トマト實をつけてゐる  
五月この道ペラ一輪さしたバスに乗つてゆく  
温泉宿はひつそりとしてゐてあしの芽  
日に日にふくらむ梅の梅畑松山へつづいてゐる  
山からおりてくる仔馬、馬と草の花咲き  
井戸からあげてトマトのしづくするのを妻  
トマト畑が一枚と雲がひとひらおひるになる  
青いみかんがもう出てゐる露店の灯になる  
山々夕焼ける線路の直線  
朱雀壬生など云ふ所京にきて歩いて秋  
水銀がしづかに昇つてくるので風がだまつてしまつた  
木蔭クレンオン濃く描く  
はだだいて鳥も歸る私も歸る鎌をかつぐ  
雀チンチン鳴いてきて桃の木満開梅の木満開

瀧川英吾

北浦信三郎

日野素木

福岡やゑ子

森田松枝

小栗水花

飯田三茶

鶴岡邦彦

犬飼啓三

煙が空へまじつ、すぐ梅雨に入る  
いなづま紙が白い夜  
うちよせて波のはひあがる貝がら  
あじさい納屋のみに咲、せて田植終つてゐる  
青葉の屋根のむきむき雨のあがり  
すだれまいてうちよこしらえたおとうふつめたい  
夕風や鳩時計の鳩が鳴く  
うす紅の實をもち段々畑の桃の木  
道が木のかげとなる空が夕ぐれ  
ばらがくれてゆくときの空氣へ咲いてゐる  
花が花のかたちに咲くしづけさは果る夜の影  
いねのできる曇さを長い道を歩いてゐる  
今日も曇くなりそ、な起重機貨車の上にはほつと初めた  
海草採つて背おうて、るめくように夕べ白波  
トツテントツテン鐵を打つ隣に青梅まいに雨におちる  
遠くのつつみを牛にのつてゆくぼたんが見ごろ  
青空女二人でりんごの袋かけてゐる  
訪ねてきて暮れおそい日の白藤さいてゐる  
一雨からりと上つた時の姿のうれほととぎす  
發動機が脱こくしてゐる美濃の岡夕焼雲  
夕空さわやかな野を咳して通る  
雪の朝は窓あいてゐて、薬局の薬品の瓶  
もう蠅のゐる魚屋は縮と醜給の小ざかなあれこれ  
壁がつくと住んでゐるトマトに支えしてゐる  
連れがあつてお墓に久しぶりなあぢさいの花

平位阿木

倉本勲也

肝陌多代

古川紅雲

高橋政二

栗田千可志

竹久清信

杉原明雄

平位青水

鹿本流一

青い雲その下ゆく雲桐咲く  
 月夜の青柿の落つる音のそれきり  
 腰をおろせば幸福があるれんげ草で  
 流に橋、子ども手にいつばい花もつて通る  
 流れてゐる水、夏の日のかわいた道にうつ  
 ぬれて灯のかげまちにふる  
 夢はばのぎようぎよくならんである一ふくとし  
 芋の葉のいきほひ青い雨  
 子どもとどこまでもどこまでも川べり猫やなぎ  
 日野菜まいたにのせてゐる妻に夕べ人がきてゐて  
 待つてやればバスのとまる所の樹とどんよりと空  
 寝てみてすすしく起きてすすしくしづくする  
 あなたが白い鳥になって船を追つてゐるよ、な海の静けさ  
 おおいと暮鳥もよんだそんな雲がぼんの枯枝  
 蛙の聲の雨戸には雨  
 大きな傘ではだして道にも流れるほどの雨  
 火花花になつて散りお祭り音する  
 犬のほえるこだまする山の暮れてくらしい道  
 夕日が、なわとんでとんでゐる影  
 からかさ日がさにして歸るカンナ咲きだしてゐる  
 轉轍小屋のさるすべり咲きたれば朝はすすしく  
 鐵を打ち鐵を打つ夏の日屋根にかんかん照る  
 萩の花こぼれてゐるのをゆききする蟻  
 ゆつたりゆつたり馬の通るスカンポの花  
 お地蔵さんお洗ひもうして輪にあんだれんげ草

下田 繁

中村未知男

樋口 草山

門藤 康生

松林朝陽子

河重 菊乃

秦 不二男

野口 光

青山さだ子

佐藤 正作

柳澤 白草

西本 イチ

横瀬青山子

雨のかつこうここに三年ふたりで住み  
 風におされるやうに腰を荷車ひいてゆく  
 砂原で遊んだころの角力とり草さえづるきこゆ  
 山遠くして山まで青田といつた月から吹く  
 海に月があつて松に月があつて風  
 弱い子ではだかで土で朝涼しい  
 トマトの花その邊のどくだみの花月夜  
 小使室の時計は、バしくうつ時計でたくさん鳴る  
 ゆきふる松のきがしづかにしてゐる  
 喪服にかえて列にはいり葵日盛り  
 涼しき霧に坐り方丈の柱  
 つぎのあたつ 足袋につぎあててゐる雪 ける音  
 割つてまきにしてつみかさねて冬を そうとする  
 冬木三本四本とある村役場のゆうひになる  
 つばきがさいてつとめるところがあつてでかける  
 人が夏が日曜初夏鈴なり電車で  
 あげ汐の大川の向う一帯の焼跡  
 木立の日に光る葉つば暗いはつば風がある  
 さは やかに 稲の花 風が朝  
 小さな家が並んで 本道があると紙芝居見てゐる子  
 きうりのちよつと曲つてなつてゐるひなたで  
 天気地報きいてからの勤め人としてけふもつゆふる  
 ハッ手に一日ふる雨一日 安静  
 春、まんまるい月ならあるいて歸らう  
 女三十にしてかたづくといふ葱の花咲く

尾畑豊舟人

池邊象外子

永井朗南人

前田 木瓜

川口 水子

中村 威

梅木 成敏

多胡比左志

田中 冴子

岡本 流一

夷石 龍樹

崩場 泰山

観音様のおひざもとお辨當の蝶々がくる  
 めどの通らない叔母とかない小鳥が歩いてゐる  
 花に花が夏の夜のゆめのような花屋の灯です  
 つつて蚊屋のかほりの青いすがしきふるさと  
 森のいきた空気を朴葉ばかりがさわいでゐる  
 石のまばらなそで釣つてゐる月がでてゐる  
 折つてめをとづるにしてかべにひとりゐる  
 百合からこぼれてきいろい花粉しばらくお別れ  
 まだまだ降る雨人も牛もぬれて植えゆく  
 石ばかりの山の石切る音の今日も暮れる  
 お母さんと聲で呼び寒い波がよせてくる 首里にて  
 電車待つまのアイスキャンデエ屋が木の降にゐる  
 こんなところもつてゆく夕立する中  
 踏切の小母さん旗をふり日まわり咲いた  
 疾走してきたヘッドライトに橋がおちた聲である  
 明日のこととはわからない握 を食べてゐる  
 赤いキキャンデエは子供が買ふ木の影  
 入口一つ窓一つそんなアパートの灯がともる  
 女の活けて行つた水仙と雨の夜ひとり  
 ふたりあるいて驚にいきづいてゐる夏の蝶で  
 くらなしの花父のない子に月が出る  
 そむかれて雨 が輪になるのを  
 水のメダカこぼさぬやうにもつて春の日  
 海の芯を顕微鏡で私が見て子供達みる  
 霧の中の真紅な太陽はだかである

福本 逸子  
 白澤 道子  
 熊崎 奇子  
 花輪 紫川  
 小川 環  
 海堀 鬼胎  
 近藤 としを  
 佐藤 コト  
 小谷 秀雄  
 小林 明峰  
 大石 香代  
 古家 一踏  
 岸田谷川水

紙賣りから七夕の紙を買つても子がない夫婦で  
 田へゆく水すこし濁つてゆく萩の花  
 たばこの葉が たけにあふれ夕日のなかのことも  
 流れがあつて小さな橋木があつて影それを撮る  
 夜明けにちよつとふつと街路樹えむいは二人で  
 終點近い終列車の顔が顔が夜が暑く  
 青いしぐなる山のかたち山の灯歸つてきました  
 寺の屋根に三羽の鳩おごそかな入日  
 日の照りきつく風の吹く庭いつげいの南瓜  
 あの雲の向うに天國があるといふことも草原  
 夕日の沈むころに達うすに別れて電信棒幾本か歩く  
 夜明けには着くといふ海の灯が一つ島  
 同じ木の罎で朝から暑く机に椅子  
 吹かれ きり葉の真日暮れる  
 兒の手に手を喪服に 讚美歌終りに近くして  
 炎天 除 草器押す腕のたくましく  
 ゆうべの嵐に倒れて咲いてゐてコスモス  
 となりの南瓜がのびてきて南瓜になつてゐる  
 かげのない炎天のそこで薬草採つてゐる  
 おやがもにこがもがつづきひよいひよいもぐり  
 待つ人まじへないよくなるないせる  
 膳のものみんな山のもの音は水い音ばかり  
 土手を行き桑畑の青々と茂る行く  
 風景 それを舟をこぎゆく夏を朝  
 浪が岩にしづかに日がのぼつてくる

山内 俊子  
 前田 一塔  
 高屋 えいじ  
 大友 疎風  
 三井 澄雄  
 梅田 幸延  
 増山田比良  
 小川 清人  
 山中 勉  
 黒部 一葉子  
 矢嶋 みよ  
 山田 三郎  
 深谷 準  
 鈴木 昇  
 白崎 一二  
 飯野無花果  
 櫻井 紫村  
 小林 秀洋

花どきのさくろの枝が風なくて曇り  
 なんとはなしにいそがしくふきのとう  
 雪のとなりの灯がまだミシンをふんでゐる  
 竹馬もつた子もゐて子供ら早春  
 除草器影せば水音たかし眞晝近く  
 二人になり一人になり野の道一つの目になる  
 山鳩なく朝の體温計の目盛り  
 庭の白い桔梗にして畫描きの家にして  
 石炭置場にひっそり見草咲いてるばかり  
 ピアノの曲が塀の空が青いまひる  
 むしろにきほして父茶を飲んでゐる  
 土まんじゅうに鉢目入れてけるだけのことか  
 利謙のような月と明星と日本は西にある  
 ももつつしはえないいろも田には水はつて空の色  
 べにがら格子の家南も中京で梅雨の日さし  
 ポプラの風がさざ波たつポットが切つて行く  
 島の形の黒くある月夜の海を歩いて行く  
 となり蓄音器がうたふたくひとり月一つ  
 朝のうち降つてメナナの葉の輝くほどなはれてゐる  
 今夜は月夜になる空が涼しいなすの畑  
 南瓜の花黄ろく咲い雨の日は家にある  
 窓きつちりしめても寒く灯に見えてゐる外の木  
 蚊帳がゆれてる風を今年もここにゐるといふ  
 蓮の花が一ばいな雨こやみく降つてゐる  
 土が青くなつてくる子どもはすこやか

下山 長  
 下山火斗詩  
 下山ふみ子  
 下山 尙  
 千葉一芋園  
 杉原明雄  
 河野春草  
 石橋露草  
 河上左京  
 北爪やよひ  
 松山ふさ子  
 柴田小百合  
 角田北の人  
 佐竹久枝  
 植野香林洞  
 平松哲司  
 平良海石  
 松山 月子  
 若本義一  
 河田十九子  
 並木里聲  
 青木丘草  
 尾 佐六  
 北口惠美子  
 鈴木 作良

一本の黍の穂の風を見てゐる  
 今日にはふるやに風呂がある西瓜も冷えてゐます  
 参打つ音を梅の落つる三つ四つ  
 しづかにとりもう螢がまこもの中  
 青葉が夢のような蝶々が机にくる風で  
 きりの中牛のなく草刈りにゆく  
 炎天のひとりたり人通り時計が鳴つてゐる  
 鐵塔の影が線路へ今日の暑さがはじまる  
 赤い草黄色い天草と咲いてお祭りさんの奥さん  
 月光乳房のまろみもつ  
 ねむはおじぎしてゐるやう梅雨まあがらない  
 雨雲しづかに垂れさがり青葉してゐる  
 つたがはひのぼつてゆく梅雨ふる  
 小さな傘ふきとばされまいとしてゐる  
 釣つてきて籠のなか魚の白い腹子どもら  
 田はうえそろひそろうて歸る親子さようたい  
 誘蛾燈が今年も灯つて青い伴父にゐる  
 富士が晴れた並木で逢つて別れてゆく  
 堤の草たべてゐる牛とたべられる草を捕む  
 焼場が持つ夾竹桃の花が暑い日ひつそり  
 カツと暑いなかの石と青い落葉  
 蓮池の蓮の葉の風音や花を持つ  
 聲がどこかにゐるそこにもここに咲いてゐる  
 しづかに降つて芋の芽のかたむいたのにも降る  
 やけあとの小舎のトタンがさびびてきてひるつきをもつ

鈴木 敬三  
 三井 静峯  
 鶴見火差之  
 春日 一舟  
 近藤 自青  
 石川 青花子  
 加藤 陸男  
 古木 三郎  
 栃本 敏男  
 永田 孝子  
 高橋 幽亭  
 梶本 壽子  
 丸山 ゆうじ  
 大城 早千子  
 大鹽 皓々  
 廣橋 鋼一  
 湯淺 影外子  
 小泉 鬼魂郎  
 伊東 俊二

## 第二の青春

井手 逸朗

黎々火はやはりまい日開門海峡をわたつてゐるであらうか。線平と山頭火のあひだをわうふくするちやうどそのように。黎々火の青春は戦争の中でちびていつた。戦争は線平のメールヘンをうばひ、さうして山頭火にてつ鉢をふたたびかへさない。山頭火は生と死のあひだをわうふくし、あたふたと旅に出て柿色の人生を憎悪した。山頭火の庵坐は死の計量であつたとはおもへる。線平はたいさうねつしんに山頭火の旬日記を整理し、整理してゐる間に旬日記が山積した。線平はこの旬日記のやう大にほとんど當惑しその當惑の中に山頭火は生と死との距離をゼロにまでもちめていつた。酒の中に水のような、水の中に酒のような味があることが山頭火の俳味であると誰かいつたのであらうか。

線平のメルヘンが黎々火を通しての山頭火への思慕であることは、山頭火の全く知ることのない文學の世界であつた。文學世界は黎々火の若年をこのように媒材としてゐる。黎々火がメダカをうたひ太陽をうたつたことはおそらくは何ほどにかこの媒材の性質に依憑してゐる。黎々火は媒材としてよりなかにどれだけユニークの世界をもつてゐるであらうか。そのことは黎々火の青春の離脱——結婚のほかにはこれを説明してくれるすべはない。彼の結婚はこの意味に於て媒材の青春の離脱を意圖しないまでもほとんど意圖するにちかひものではなかつたであらうか。ユニークの世界は岸壁と輸送船と煤煙の通りすぎる海と國鐵従業員の制服の中で立ちあがり、あ

らあらしい手つきで階段をあがつたところの壁をノックする。彼の新妻は彼の二度目の青春の中では、少くとも第一の青春の墓標であつたといふことのほかの意味をもたない。彼は二度目の青春の中では尿意をさへもよほし、さうしてとう／＼放尿の無意をあへてした。こゝに彼の開悟を見る。

彼、小男であるからネクタイをたらずと地面にたれる。ネクタイが風にはためくことを地面がさまたげる。その地面は長府から横濱に通じ、小豆島の南郷庵へは海の底を海、底となつて通じてゐる。彼はやたらに短律の鍵盤をたゞいてゐる。音色が彼のネクタイの色と同じであるかどうかをたしかめざる耳の様子で。

短律というものが第一の青春の喪失であり第二の青春の發端であることを彼位知つてゐるものはあるまい。それ故にまじ層雲短律の歴史を彼はゆがめようとするものではない。もしも彼が短律を彼の第二の青春の中で新粧してゐることを嫌悪する人があるならば、彼は第二の青春のほてる顔の中でそのことの辨解をしようとするかも知れない。彼はたしかにあやめのさく彼の長府の家の中に老ひたる母と虹のような妻君とをもつてゐる筈であるから、或はひよつとするとそのやうなことの辨解を拒否するかも知れない。彼の短律自體が明粧をもつてゐることの故に。

彼は明かに焦慮をかんじ、ユニークなものの中でのみ發言しようとする焦慮を大切にす。後二の新粧がはつきりと個性的なものであることを知り、また星童宵火の青春に追ひつかれようとする氣はひがわかると彼は独自の世界を打ちたてることの意義の無駄でないことを知る。そのユニークの世界を彼は感性をばつぶした知性の中に入らしたてようとする。彼の短律はこの意味に於ては人工樂園であ

る。その根本に於て知性がはたらき、その遺花に於てアーティフィシャルである。

彼はほんとうは、彼の人生の中の出来事である彼の規律を知らな  
いわけではない。規律は第二の青春であることの規則を改めること  
は出来ない。彼になし得るたゞ一つのことはこの出来事を出るだ  
け戯言化することである。このカチアアラムズの故に彼の規律は  
いつでも人生的であることから遠ざかり月のひかりの中でさまざま  
の仕草をする。彼は一種のピエロであることを默會する。

彼の人工樂園は月と石と石とからなりつめたい。つめたいのは彼  
の體臭ではなく、彼の造園意識である。人は彼の人工樂園にこの程  
度のうそとまことがあることを理解せねばならぬ。さうすれば安心  
してこの庭の中であそべる。

こしかけて 石が月夜

眩惑されることはない。此月夜に誇示があること、腰かけてゐる男  
が小男のピエロである事をはつきり知りつくせなくてはなるまい。

家のもつ影を出てゆく

この月夜の中をゆつくりと影の中から出てゆくものゝその影が問題  
である。私は少なくともこの出てゆくものは黎々火のほかの人であ  
るまいとおもう。彼はこのように自分以外を描かない。人を描くこ  
とは彼の興味の中にない。

夜に出た月をこどもを抱く

この中には悲痛なるピエロの哲理がある。彼の第二の青春の中では  
彼も遂にこども抱かないわけにはゆかぬ。それにもかゝはらず月を  
抱くとは——あゝこれ黎々火の月。

雲が群れてゐる壁

これははつきり月夜の雲である。白い壁のこちらに草のかげがあり  
月は雲の中に或は地平の中にあるかも知れない。白い雲がむらがる  
ように壁にある。こゝで彼の姿が出てこないわけは彼の小さい姿が  
草の中に埋れゐるためだ。

たまく彼が月と石と壁の世界から出たとき彼はもつとも平凡な  
る人生詩人である。

おとなりへ月夜道がある

この中にはそのような平凡な彼が半分だけのぞいてゐる。

とぼしきに日をあててゐる

何というしみつたれた敗戦圖畫であらう。さうして何というありふ  
れた孤高であらう。鼻むけのならぬ宇宙諦觀、彼であるが故に、し  
かし彼とてもまたこのうな圖畫を描かねばならぬのだ。

照つて、日が昏れるまである

彼は直ぐと人工樂園の中にかくれる。この觀照の中には涅槃の極  
彩色光を感じるであらう。彼の失樂園は、人工樂園からの逃避でな  
く、樂園そのものの崩壊なのである。いうまでもなく彼の樂園の地  
盤はきはめて脆弱である。

身一つのほかはその荷物腰かけてをる

月光の世界がやつぱし員満列車の中にまであることを知る。腰かけ  
てをるとは黎々火のいつものポーズである。

水に影が日があたつてゐる

あやうく彼は情緒の中におちこもうとする。だがこの陥没を救うも  
のは日があたつてゐるといふ平面描寫のためである。彼は月と日と  
を混同することがある。彼は近視眼では更々ない。

壁のそとから朝が、冬

壁のそとから、(とうとう月が消えて)朝がやつてきた。黎々火の冬  
のつめたさはこのようにきびしい。

・層雲社句會

第二回例會、八月十七日午後。神戸から英之助、夏木、六郎、都子の面々、西宮から信夫遠外。當日の高點を神戸の人達がさらつてしまつ。殊に都子さんは新人ですばらしいと評だつた。次の例會日、九月は二十一日、十月は十九日。

窓、窓、だんだらの日、除けして、みなと  
 陽をさけ、ゆく青い目鏡、夾や桃咲いてゐる坂  
 ぬれ、た、あと、か、ら、月、が、出、た  
 針に糸通す時の横顔よこから見てゐても好き  
 二階が捨てた水が向口葵の葉を濡して暑い  
 子に手をとらわゆくに草のかけとき月夜  
 松もうつり風がなつ雲のしはになる池  
 島の灯は見えない、蜘蛛ねむる島のかたち  
 その日その日の車思ひ強く草ぬく  
 香ばしい匂もなく小鳥も鳴かず朝夕ある  
 灯をうけて猫がやけた舗道を横ぎつに  
 大きな西瓜がひとつ少し傾い、在る板の間  
 太陽は茂りの深くまで射しこんでゐる  
 日がくれる迄木に鳴く蟬と田の中に這うてゐる  
 水引草が伸びて咲いて水引のやうな  
 松丸、太の年輪にむかひ夏朝  
 汗をさびしくひるすぎし炎天  
 ふるさとの言葉ふるさとの聞いて言葉にはだか  
 唾の、もの言はうしする指さし、おしろいの花  
 ペン先かえて朝のうち言葉が涼しいうち

・泉の會 (京都)

八月十日午後、新日本生命社樓にて。  
 川音あけてゐる竹藪すけてゐる  
 たべるほどは漬けるほどは漬けて漬ける

- 郁子、六郎、夏木、英之助、信夫、車郎、双泉、二郎、昭人、笛人、豊明、千代吉、榮郎、朝陽子、香村洞、泰山、俊朗、小平、木衣樓、俊二

- 冬川、阿歩

古枕木がつんである馬鈴薯の花  
 田植の泥足が泥道あるいて行く足あと  
 てがみよみ終り夕立あとの蟬  
 日夜水に水、ちるお別れの手紙書かうとする  
 稲青しとしより裸下瓜かつぎくる  
 一番星が學校の上まじ子供ふらここにある  
 他に吸江氏出席。泉の會は毎月第二土曜午後。九月は十三日、十月は十一日である。

・菊の會 偶會 (京都)

七月十八日、黎々火突然下關から来て後二居に二泊する。一晩は祇園の灯の中の木衣樓居を訪れて四方山話、信州の江畔居のランプを語るなどした。石と月と木と、またまた掘り下げて、さうして石はあらゆる角度から見たいと黎々火が云ふた。

夏が家のそばの日かげ  
 ひかりひまわりがらいてゐるやまのすそ  
 コップに浮かせた氷のかけら灯の下三人  
 黎々火、木衣樓、俊二

・木立の會

大阪能勢山の會と兵庫三田みのりの會と合詞の句會を隔日催すことにしてゐる。八月は阪急寶塚線清荒神寶泉寺で催した。みのりの會から恩一、赤曾葉、一一、山の會から應香、草史郎、喜太郎、夢歌緒、蝶三、夢郎の九名参集した。歡樂境の寶塚ではあるが此處は植園に近い閑靜な禪寺である。

箱植の茄子もいで川風にゐる  
 一本、本、道、が、白、い、す、す、き  
 或ひは草の實となつてこぼれ風の中  
 額、の、汗、ふ、い、て、や、つ、て、あ、お、い、や、つ、寢、る  
 此家、一、つ、の、を、空、に、あ、け、て、ゐ、る  
 互選句評のあとでおのの自作を一句づつ出して衆議にかける。

自作ながら疑問を感じてゐる句、意圖の逞しい句など野心作ばかりで、それを忌憚なく論じらひ有意義だった。今回は十月十二日、この寶泉寺で催す。道順は急、塚線流荒神下車、下手へ約「丁」かわも橋を右へ渡つたところ。  
阪神方面の人 出席を希望します。(夢郎)

・楠の會(神戶)

八月九日夜、滴々亭にて、  
船具屋があつて此邊焼けてゐないプラタムをびびりに夏  
うらから山がのぞいて暮れてゐる宿屋の構へ 夏木  
銀河、あをくさの句ふを 郁子  
それでも朝は涼しく高架線のくざつた空 きよし  
抱くには、小さな骨壺影もちてゆく 六郎  
楠木の會は毎月第二十曜夜開催。九月は十三日、十月は十一日。

・妙蓮寺句會(横濱)

横濱と鎌倉と合同で、八月はハマの會が會番で妙蓮寺で日曜の十日の午後開催。鎌倉から燗火一人。東京から齋人、秀夫、單衣女、稻市、篤子、番紅。花横濱の鳳車、香樹、八洲雄の十人。いつもの會よりもいささか淋しかった。鎌倉横濱の人達は振つ、参加ありたい。九月は鎌倉で、鎌倉中學校の永井燗火に照會ありたく、十月は妙蓮寺で催す。鎌倉では道の木樫が白く萩も咲きかけてゐるだらうし、妙蓮寺では名高い木犀が丁度盛りの中である。

・普門句會(茨城)

八月十四日、中原居にて、第八回の例會である。二十人集つた。  
若竹のすがしき朝になり蚊帳をはずし 雨村  
疲れて横になれば南瓜の花はきいろい花 菖子  
トマト籠に盛られ霧はれてゆく 純  
辨當箱に切身買つて行く夏が日暮れる 田比良

普門句會は福田井村を中心に集つてゐる。例會は毎月十日頃の豫定である。冊子「普門」を不定期に刊行してゐる。幹事は茨城縣藤代町櫻井菊男である。

・日立句會(茨城)

七月十二日午後、日立鎮山神峯寮にて。庄吉、明、國雄、仁、義雄、一郎、進、昇、尚、節子、鈴村出席。  
笑へない喜劇をかみしめてゆく街の暑い巷情 明  
電線を走つては落ちる水玉がしづか 午後 尚  
白い涙が打つてゐる蟹がさきやいてゐる 仁  
日をおとした空へ煙がゆく方へゆく 一郎  
旅を戻つて何事もないう子供たちと夜いくたもの 鈴村

・やまめの會(山梨)

山梨の西ノ村。百峯、満州から復員してきてから、出来た句會で若教師と若い行先とが十人餘り集つてゐる。油がのつてきて此頃は月に三回も句會をする。盲蛇におちすとつた、勇敢な句が多い。夕方集つ、談論して、大抵曉に及んで散る。につばん山のこのこの句會を井中の蛙にしな、やう、皆様の示教と鞭撻をお願いします。幹事は降矢百峰、北都留郡西原村。

・山なみの會(長野)

層雲が本格的に軌道を走りだしたのと呼應して、山なみの會も活動を開始する。「火山」の題號で月刊誌を出して據る。この用紙は約二ヶ年分確保したから心強い。八月十七夜、再出發第一回の句會を行雲山房北原居に催した。北原、北光、白草、勝男、亞泉、博英、丘草の七名。山房、畑のもろこしの葉、風にれてさやくと鳴り、たくましくのぶた蔓にたくましく南瓜が生つてゐるのが夜目にも見え、話も豊かで興盡きなかつた。山なみの會の幹事は風間北光(長野市外西風間村、火山と友誼と交換願ひます)。



・北信濃の會（長野）

曾乾居士の追悼句會を八月二十二日善壽寺で催した。句囉郎、五輪峯、白雲、左紀、悠宏、忠行、抄花、直次、真梨、泡沫、正、三代藏、竹葉、笛月、たけし、比ろし、りえん、春三、井兒、まこと、定美、天狼、松二、千可志、白夢。水け豊かだし天は晴れてゐるし青田、よい、青く山青く、まことに八月大名といつた一刻を、故人を語り句を語つた。

・曳馬野吟社（靜岡縣）

舟洋さんを迎へて、八月度第二回句會を十五日卓二居にて催した情熱が溢れて、時には詭辯を弄するの感さへあり、とにかく若々しいのが曳馬野の特色である。會員は五十名に達してゐる。今日の例會は、めづらしく數的に靜かだつた。保榮、雄辯はおそろしい。その辯保榮の句には點が集らない。

梯子ならいつもの所においてゐるよよい月が出てゐる  
夏あさはたらきにゆく、つい茶をのみ  
北斗が屋根に切れやすい機絲を  
くもがうみにのまれてしまひふが一つある  
夜は星からくる風の體温器の目盛  
月を待つて二人に話のつぎ穂がないので

・村上句會（新潟縣）

四日につづいた豪雨も漸く晴間と見せた七月二十六日、村上中の学校の宿直室で第二回句會を行ふ。一句一句に真劍句評  
うらにあさみをうけ山から雲の流れ草刈り終え  
明けてくるときのたのしき蟬がなきだした  
嵐の田に雲わて蛙ないてゐる  
愛は執着にあらす夕がほの花咲き

・鶴の會（津山）

舟洋 二  
俊子  
保榮  
星草  
星介  
兒

茶丘君の嬉しいはからひで君の茶室に集る。庭の水に蟬の鳴くのも涼しく。

暮れてくる水田を山の松の木夕日  
暑さもけふは裏山のひぐらし  
渡し場で別れてからはみちのてふてふ  
歸還して天の川は白いふるさは青葉の匂ひ  
島からボンボン船でるきらきらする波  
一日をすました涼しさである行水する  
雨のあがると雲の七色山々夏  
他しげる、青花子出席。

・みどり會（山口縣）

高松庵といふ尼寺で、八月七日第一回の句會。參集五人。肝心の庭草、空念、悶の爲の缺席は氣の毒だつた。

ます牛の草刈るとして朝をあさつゆ  
月が出ることも濱の堤女の確のする  
水雞なく頃がきて今年もその田私は百姓  
月がかさきてとぶはこうもり  
病む身ひとりゐる木の蟬  
川がくねつて篠の赤い穂が土用早

・草心句會（秋田縣）

八月十日午後、吾亦紅居で、來會者せいじ、蚤明、燈光、冬三、冬草、真梨、辰男、陸郎、吾亦紅。陸郎は吾亦紅の末子で六年生である。

たんばはほけたのばかり南部の方かみなり  
かなかな雨の明るさ居すまひを樂に  
幾日ぶり小日の目が出てきた路のひとびと  
朝ははれゆく山より落花の花にてふてふ  
さしき鯉ゆるゆるとおよいで難も見えない

蚤明  
冬草  
せいじ  
燈光  
陸郎

ハワイ俳句會

今年も来て椰子島の、月が三日月であるさへ  
 とんぼとんでもとんでもひろい夕空  
 父の日として来てくれてその坐るべくあるふとん  
 妻子のゐる景色の中土をうちおこすなり  
 無雑作に咲いた花のいろいどこにも道がある  
 海あかりは月の、波の動く波の音  
 町をはづれると暑い日の風も草の穂  
 ビル出来上るとはやも西日の影投げてゐる一本  
 谷底いつげいに朝日鳥が啼いてゐる  
 話も、庭のちいさく咲いてゐる花も夏くれがた  
 つなみのあとの椰子の梢にしかとついでゐるやしの實  
 椰子の満月、ちのみおとは夏

他、きさら、里聲、偉駄天、日張、信夫、夢明子、しぐれ、十  
 九子、義一、北の人、海馬石田席。日本より送句、溪水、芳木  
 ・右の句會通催が翠山氏から寄越された。七月詠草とのみあつ  
 て通信文はないが、これはたぶん、七月十三日、素仁氏のモク  
 レア別荘での句會であるらしい。ハワイの同人は皆無事であつ  
 て、毎月同人の宅を順々に廻つて句會が催されてゐるらしい。  
 素仁氏のお孫さんが戸塚に進駐してゐて、私も一度訪問したが  
 時間なくあはたしくして語る暇なかつた。大阪に文詩朗氏の令  
 弟が居られると聞いて訪ねたが既にハワイへ還られたあとだつ  
 た。今のところハワイの人達の動靜は詳しくは解らない。

(後二附記)

投稿規定

- 俳句 萩原井泉水選 編集部選
- 投稿は誰でも自由
- 一人 一月 一篇
- 句数は一般は五句 會員 Bは十句 Aは三十句迄
- 用紙は半紙二ツ切大のもの 一枚に五句迄楷書清記
- 二枚以上は左上カドを綴る
- 句稿の添削を望む方には内規がある照會ありたく
- 文章 編集部選
- 評論 研究 隨想等
- 俳句會報
  - なるべく會の直後に詠草に會の報告文を添える
  - 俳句會報は層雲社に保存しおきます
  - 投稿に私信や用件を同封されても差支えない

締切 毎月十五日  
 投稿先 層雲社編集部

京都市東山區本町十五丁目

層雲 第四〇八號

昭和廿二年八月廿五日印刷納本  
 昭和廿二年九月一日發行

定價 一部 十五圓

(送五〇錢)

前金で半年分以上お拂込下さい  
 何月號よりと御指定下さい  
 御轉居の際は發送部迄御報の事

神奈川縣大船町山之内(龍洞)

主宰 萩原井泉水

編集兼 發行人 伊東俊二

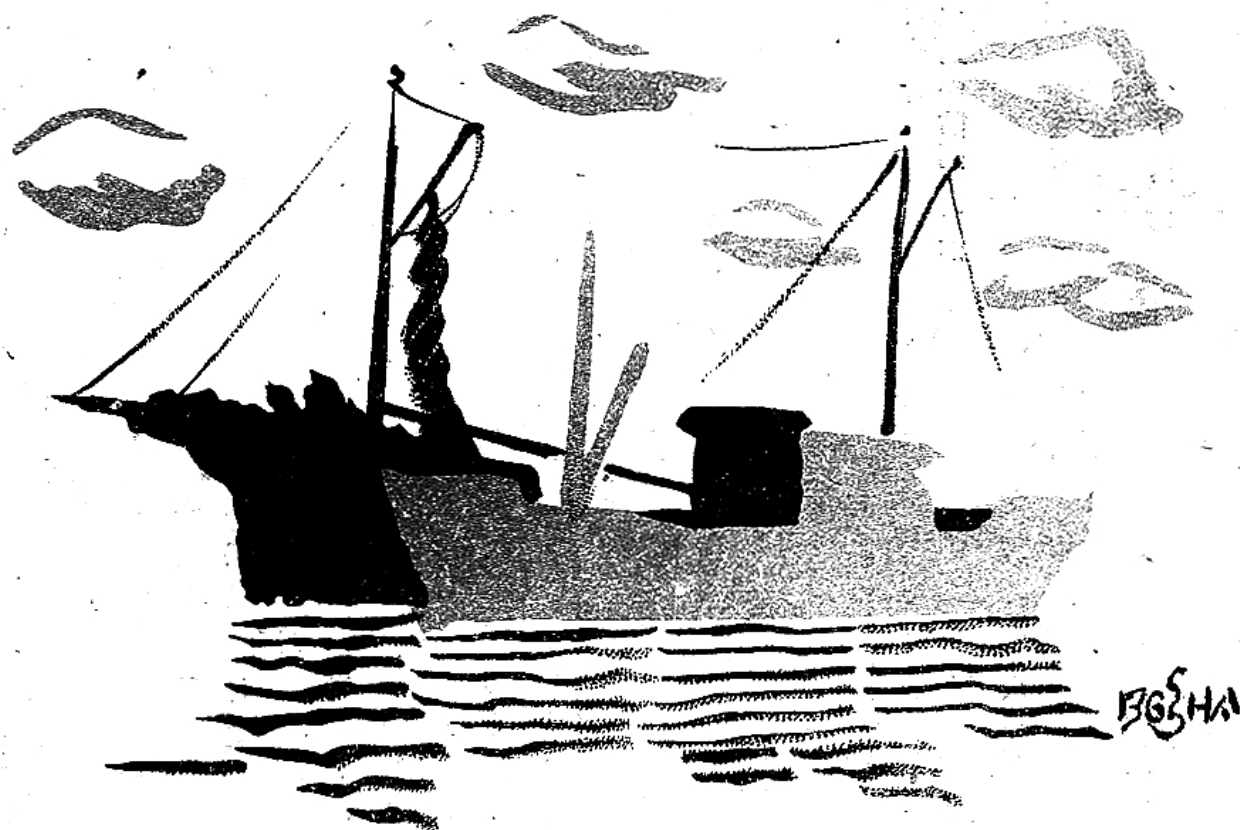
印刷人 竹内實美

京都市柳馬場四條上ル

印刷所 竹内萬聚堂

發行 層雲社  
 京都市東山區本町十五丁目  
 振替京都八一七八番

東京千代田區淡路町二ノ九  
 配給元 日本出版配給株式會社



# 船 具 ・ 工 具 ・ パツキン

神 戸 市 兵 庫 區 西 出 町

## 堀 製 機 船 具 株 式 會 社

代 表 者 堀 英 之 助

會 例 會 堀 英 之 助 方 に て

每 月 第 二 土 曜 夕 六 時 ・ 第 四 日 曜 午 後 一 時 よ り